

国際会議 ICCBEI への参画

建設情報に係る国際交流・国際貢献事業に関するプロジェクトチーム
チームリーダー 海津優

1. ICCBEI 発足の経緯

(公社)土木学会情報利用技術委員会と(一財)JACICは共催で2006年以来毎年アジア建設IT 円卓会議を開催してきた。この会議は、情報技術を使い建設産業のパフォーマンスを向上させること、ひいては各国さらにアジア地域の国土整備や保全に寄与することを目的として、

- ・建設産業全体を俯瞰する視点から建設産業への情報技術の適用の可能性の評価
- ・IT技術適用を成功させるための課題の抽出・整理
- ・技術開発や技術政策の方向性の議論

を目的とするものであった。

このため、アジア各国の建設ITに関わるキーパーソンを招待し、

- 1) 建設産業におけるITの現在の利用と課題
- 2) 建設産業のためのIT政策の現状と課題
- 3) 建設産業におけるIT利用の将来像
- 4) ITに関連する技術開発や技術政策のあるべき方向
- 5) アジア建設IT会議の開催可能性

などを議論してきたところである。この活動の成果として、第1回会議において、「アジア建設IT 東京宣言～情報技術を通じたアジアの建設産業の連携を目指して～」が公表されたほか、アジア建設IT データブック(英文)が取りまとめられ、毎年の会議ごとに修正、追加がされてきた。また、会議での発表に利用された資料は、JACICのウェブサイト内のアジア建設IT 円卓会議のページからダウンロード可能になっており、その時々各国の状況およびIT分野の取り組みについて広く参照してもらえる資料集となっていた。

8回を経過してアジア建設IT 円卓会議はその所期の目的を達成したことから、2012年8月の会合において円卓会議を発展的に解消し、この地域で開催される、世界に開かれた建設情報学の国際会議としてあらたな活動に移行することを決議するとともに、この活動の母体としてAsian Group for Civil Engineering Informatics (AGCEI)を発足させることとした。



図-1 第8回アジア建設IT 円卓会議

建設IT分野での国際的な会議としてはInternational Conference on Computing in Civil and Building Engineering (ICCCBE) があるが、これは隔年に開かれるので、ICCCBE が開催されない年には、欧米等の地域ではそれぞれの地域の会議を開いている。一方、アジア地域にはそのような会議がこれまでなく、他地域へ出かける等、負担が多かった。この際アジアを中心としつつ全世界に開かれた新たな国際会議を、他地域同様ICCCBEの開催されない年に開くことにしたいとの意見が出され、賛同を得た。その上で、新国際会議の枠組みについて議論がなされ、下記の内容が合意された。

- ・ 運営組織の名称：Asian Group for Civil Engineering Informatics
- ・ 国際会議の名称：International Conference on Civil and Building Engineering Informatics
- ・ 目的：ICCCBE の定款をベースに今後作成（アジアを強調する）
- ・ 会員資格：個人参加とし、国や地域の代表としない
- ・ 運営主体：理事会とする
- ・ 初期メンバー：JACIC と土木学会が推薦する
- ・ 事務局：大阪大学矢吹研究室（JACIC の協力）
- ・ JACIC の位置づけ：AGCEI 理事会の重要なメンバー（特別会員）
- ・ 会費：無料（国際会議は参加費による独立採算）

また、AGCEI の理事長には大阪大学の矢吹信喜教授が就任することが合意された。

第 8 回アジア建設 IT 円卓会議に合わせて開催された講演会では、矢吹教授より ICCBEI の構想についての講演があり、上記の方向性が公表された。



図-2 ICCBEI の構想について講演する矢吹教授

2. ICCBEI への JACIC の関わり

第 8 回円卓会議席上では特に海外からの出席者から、今後も JACIC が AGCEI においても関与し続けることが必要である旨の発言がいくつかあり、前項で述べたように、JACIC は AGCEI の重

要なメンバーとして位置づけられ、JACIC 理事長が AGCEI の理事を務めている。ICCBEI では、研究機関だけでなく産業界からも積極的な参加を期待しており、産業界からの参加者を意識した JACIC セッションを開催することを提案、認められた。

JACIC としては、

- ① JACIC セッションの開催、
 - ② 国内開催時に現地実行委員会への参加、
 - ③ JACIC 職員による積極的な論文発表
- などを通じて ICCBEI の運営に参画していくこととしている。

3. 第1回大会（ICCBEI2013Tokyo）と JACIC セッション

円卓会議での合意に基づき、第1回大会 ICCBEI2013Tokyo が 11 月 7、8 両日、東京都江東区青海の東京国際交流館プラザ平成にて開催される。

査読を経て会議の場で発表される論文は約 70 編でそのうち半数を超える 40 編ほどが海外からの参加者の論文である。JACIC から 6 編の論文が発表される。



図-3 ICCBEI2013 のウェブサイト

初日には国土交通省佐藤直良顧問による基調講演が決まっており、JACIC はそれに引き続き JACIC セッションを共通セッションとしてパネルディスカッション形式で開催する。

JACIC セッションのテーマには、基調講演が CIM に関することを中心としたものになるであろうことを踏まえて、「日本における CIM の動向と国際協調によるプロダクトモデルの構築」が選ばれた。CIM 試行事業を行う等、国も積極的に取り組んでいる中、内外の関係者が壇上に会し、我が国における最近の CIM への取り組みを中心に、諸外国における同様の取り組み、その中でプロダクトモデルの標準化に関する活動などについて議論を行うことを通じて、我が国の CIM に関する世界への情報発信の機会とするとともに、先行する諸国、近隣の諸国との情報交換、日本の取り組みへの期待などを共有する場にしたいと考えている。

座長およびパネリストは以下のとおりである。

座長	矢吹信喜	大阪大学大学院教授
パネリスト	高村裕平	国土交通省技術調査課 建設システム管理企画室長
	山下純一	日本 IAI 代表理事
	坪香 伸	JACIC 理事
	謝 尚賢	国立台湾大学 教授
	クリストフ・カスタン	フランス EGIS 部長、Building SMART

国際学会であるので使用言語は英語であるが、CIM に関する情報を収集するために参加される聴講者のために、基調講演と JACIC セッションには JACIC の貢献として通訳がつき、一般の参加者も日本における CIM の動向を日本語で聞くことができる。

4. 今後へ向けて

ICCBEI は今回が第 1 回である。ICCCBE が隔年で世界をめぐり、その間の年は ICCBEI が隔年でアジア地域にとどまって開催を続けることが構想されている。第 2 回以後については、立ち上げを決めた第 8 回円卓会議において、最初の 3 回程度を日本で開催し、それからアジア地域を持ちまわってはどうかとの議論があったが、正式には今回の会期中に開かれる AGCEI 理事会で方向性が議論されることになる。円卓会議での議論では第 1 回は東京、第 2 回は関西（奈良あるいは京都など）、第 3 回は仙台周辺という考えが示されている。第 1 回の論文応募状況から考えてかなり多くの外国からの発表が見込まれており、あまり助走期間を要さず日本以外の国からも自国での開催希望が出てくる可能性もあることから、理事会の議論が注目される。

JACIC は、国内で開催されるときには今回同様、JACIC セッション、職員の論文発表、実行委員会への参画という形で関与していく予定である。海外で行われる場合も、AGCEI への理事長の出席、職員の論文発表等を通じて積極的に関与していくこととしている。

この新たな国際学会が無事軌道に乗り、建設 IT に関する研究発表、情報交換、情報発信の場として、アジアから世界への窓口として発展していくことを期待してやまない。

Participation in International Conference, ICCBEI

Masaru Kaidzu

Team Leader, Project Team for international exchange and contribution on construction informatics

Abstract

JACIC has been running Asia Construction IT Round Table Meeting (ACIRT) in conjunction with Japan Society of Civil Engineers (JSCE) since 2006. During ACIRT 8th meeting held on Aug. 2012, it is agreed that the ACIRT has achieved planned target and should be re-organized toward open academic meeting. To handle the new meeting, Asian Group for Civil Engineering Informatics was established and the president of JACIC joined as one of board members. Name of the meeting is International Conference on Civil and Building Engineering Informatics (ICCBEI). The first meeting will be held at Tokyo on November 7 and 8, 2013. On the day of presentation of this paper, the meeting will be over and more concrete report will be made.

要旨

JACIC は土木学会と共催で 2006 年以来、アジア建設 IT 円卓会議を開催してきた。2012 年 8 月に開催された第 8 回円卓会議期間中に、円卓会議は所期の目標を達成したので、より開かれた学術的会合に変わっていくべきであることが了承された。この新たな会議を運営するためにアジア土木情報学グループが結成され、JACIC 理事長が理事として参加することとなった。会議の名前は、国際土木建築情報学会議（ICCBEI）とされた。第 1 回会議は東京において 11 月 7 日、8 日に開催される。この論文が発表される時はすでに会議が終わっているのでより具体的な報告をする予定である。

(参考)

「行く」は「いく」か「ゆく」か

「いく」と「ゆく」は、いずれも標準的な言い方で、どちらか一方が誤りであるということとはできない。

人によって多少語感の違いはあろうが、どちらかという、「ゆく」のほうが文章語的で、いくぶん固い言い方、改まったものを使う場合の言い方であるのに対し、「いく」のほうは、口頭語的で、いくぶんやわらかい言い方、くだけた言い方であるといえるようだ。

『万葉集』には「伊可奈(いかな)」「伊加武(いかむ)」「伊久(いく)」「伊気婆(いけば)」などの例があるので、「いく」という言葉が当時からあったことがわかるが、「ゆく」の用例のほうが更に多いことが明らかになっている。また、『類聚名義抄』『色葉字類抄』『節用集』などの昔の辞書には、「ゆく」はあるが、「いく」というのは見あたらない。これらのことから、昔は「ゆく」のほうにより標準的であったと考えられている。

しかし、「いく」の連用形が「て」「た」「たり」に続く場合、「いって・いった・いったり」という促音便の形が用いられるが、「ゆく」には、「ゆって・ゆった・ゆったり」という言い方はない。したがって、このように、「ゆく」の用法が限られているという点からしても、現代の口語としては「いく」のほうを基準と考えてよいであろう。

ただし、次のような、やや文語的な言いまわしの複合語の場合は「ゆく」と読み、「いく」とは読まないのが一般的である。

行きがた知れず行き暮れる行きずり(の人)

行きつ戻りつ行き悩み行き場(がない)

行きまどう行きまよう行く秋

行方(不明)行く先々行く末行く手

行く年(くる年)行く春行く行くは

小・中学校の国語教科書などでは、右にあげた複合語の場合は「ゆく」と読むが、単独の動詞形で「行く」と表記した場合は「いく」と読むようにしている。また、補助動詞として用いられる「……ていく」の場合は平仮名表記をするのが普通である。

なお、文学作品の場合は、原典尊重の立場から、原文どおりとするのが一般的である。

(社団法人日本教科書協会による)

というわけで、教科書では仰せの通り「いく」であるようですね。